

# 祭りであつなげ、地域の未来 ～地方銀行が祭りを盛り上げる～

業務部 調査役 早川 由紀子  
副調査役 島 裕輝

- 地域の祭りは、多くの参加者・見物客による賑わい創出、幅広い経済波及効果、そして何より、地域全体を巻き込んだ熱気と一体感を生み出す、他の何物にも代えがたい社会・経済的価値があります。
- 近年、地域の祭りの担い手不足等の課題が指摘されるなか、地方銀行は、祭りへの参加や支援を通じて、地元の祭りを盛り上げているほか、新たな発想による祭りの魅力発信等に取り組んでいます。
- この夏は、皆さんも、帰省先や観光地のお祭りで、地方銀行員の意気込みを感じ取ってください。

## はじめに

梅雨が明ければ、いよいよ夏本番。帰省先や観光地で祭りを楽しみにしている方も多いのではないのでしょうか。

その一方、近年、地域の人口減少や少子高齢化、就職・進

学による地元離れなどにより、地域の祭りの担い手が維持できなくなっているとの調査結果もあります。

### 岐路に立つ「祭り」

祭りを取り巻く現状をみると、例えば、日本経済新聞の記事<sup>1</sup>によると、都道府県が無形民俗文化財に指定した祭りや踊り等の伝統行事（2016年5月時点で1,651件）のうち、2016年12月には20県の60件が、継続的な実施が困難として休廃止されている

とのことです。また、2019年3月に公表された文化庁の「文化に関する世論調査報告書」<sup>2</sup>によると、1年間に、地域の伝統的な芸能や祭りへ参加した人は、2016年の13.8%から2019年には6.4%まで減少しています。

地域活性化の取り組みには様々なものがありますが、とりわけ、地域の祭りは、内外の多くの参加者・見物客による賑わい創出、幅広い経済波及効果、そして何より、地域全体を巻き込んだ熱気と一体感を生み出すものとして、他の何物にも代えがたい社会・経済的価値があります。加えて、変化する時代の中で、新たな発想で祭りを進化させ、

その魅力を発信していくことは、地域の祭りの持つこれまでにない可能性を切り開くものとなるでしょう。

本レポートでは、地域の将来を見据え、地域住民の方々と一体となり、地元の祭りを“本気”で盛り上げる地方銀行3行の取り組みを紹介します。

## 夏の訪れを告げる祇園祭で歴史と伝統をつなぐ～京都銀行～

修学旅行生から世界中の観光客まで多くの人を魅了する古都・京都。神社仏閣をはじめとした数多くの歴史的建造物が立ち並び、年間を通じて多くの祭りが開催されています。

**京都銀行**は、「地域社会の繁栄に奉仕する」という経営理念のもと、地域社会の一員として、地域の祭りに積極的に参

加しています。中でも、毎年7月に開催される祇園祭は、同行にとって一大イベントです。



▲ 京都銀行行員らが曳く月鉾。京都銀行提供。

### 八坂神社の祭礼、祇園祭

祇園祭は、日本三大祭りの1つにも数えられる八坂神社（京都市祇園）の祭礼です。その起源は古く、貞観11（869）年に、京に疫病が流行し、多数の病人、死人が出たため、当時の国の数である66本の矛を立て、祇園社の神輿を神泉苑（中京区御池通大宮）に送り、悪疫を封じ込む御霊会を行ったのがはじまりと伝えられています。

毎年7月の1か月間開催され、期間中、八坂神社と氏子区域で

様々な行事が行われますが、中でも、祭りの中盤（17日の前祭、24日の後祭）に行われる山鉾巡行は祇園祭のハイライトです。

2016年には、祇園祭の山鉾巡行が、ユネスコ無形文化遺産に登録され、世界からも注目を集めるようになりました。2023年の祇園祭（前祭の宵山から山鉾巡行の期間）の来場者は82万人と推計されています。



## 山鉾の曳き手ボランティア

京都銀行は、地元根差した金融機関として、長年にわたり祇園祭に協賛していますが、1988年からは曳き手ボランティアとしての協力も行っています。

山鉾の曳き手は、各町で集めることが基本です。京都銀行は、祇園祭山鉾巡行への奉仕団体である「京都・祇園祭ボランティア21」に加盟し、各地区の保存会の山鉾の曳き手として重要な役割を果たしています。2022年の祇園祭で約200年ぶりに復活した山鉾「鷹山」には、三条支店の行員が曳き手として参加。また、重さ12トンと山鉾の中で最も重い「月鉾」の保存会とも交流を持っており、毎年、月鉾の曳き手として参加しているほか、山鉾巡行の先頭を飾る「長刀鉾」に、四条支店の行員が曳き手として参加しています。

## 新入行員が祇園祭を盛り上げる！

京都銀行は、毎年4月、その年の新入行員を中心に、曳き手ボランティアを募集しています。同行の行員は、「地元貢献したい！」との思いが強く、結果的に、毎年多くの新入行員から応募があるとのこと。

曳き手ボランティアとなった新入行員は、暑い夏の1日、地元の人に教えてもらいながら、初めて大きな山鉾を曳くこととなります。このような機会を通じて、普段は取引のない地元の方々とも交流が深まり、地元への愛着心も高ま

2023年の祇園祭には59名の行員が曳き手ボランティアとして参加しました。



▲ 月鉾ボランティア参加者。京都銀行提供。



▲ 月鉾に飾られた提灯。  
京都銀行提供。



▲ 本店営業部入口。  
京都銀行提供。

ります。さらには、普段は別の支店で働く同僚との絆を深める機会にもなっているとのこと。

同行では、曳き手ボランティア以外にも、本店営業部や山鉾の巡行ルート周辺の支店で浴衣を着用したり、山鉾に飾る提灯への協賛献灯や、粽（ちまき：笹の葉で調製された疫病・災難除けのお守り）の包装袋への広告協賛など、様々な形で祇園祭を盛り上げています。



▲ 浴衣を着用した本店営業部行員。京都銀行提供。

## 祭りとともに京都の伝統産業を守る

祇園祭の山鉾は、釘を使わずに組み立てられており、京都の伝統産業である西陣織の飾りも取り付けられています。このように、祇園祭は、京都の伝統的な技術や地場の産業を継承する役割も担っています。しかしながら、こうした伝統産業を営む事業者の中には、高齢化や後継者不在により、廃業するケースもみられます。

京都銀行の親会社である京都フィナンシャルグループは、地域産業の継続・発展をサポートし、未来へのイノベー

ションへと繋げることを目的に、2024年4月、歴史・伝統・技術等を有する事業者を応援する「地域みらい共創事業」を開始。専担のコンサルティング統括部署として、「地域みらい共創室」を設置するとともに、新たに1千億円の投融資枠を組成しました。

京都銀行は、グループを挙げて、祭りへの参加と、祭りを支える地域産業のサポートの両面から、祇園祭を守っていきたくとしています。

## 大型ねぶたで2つの銀行と地域の未来をつなぐ～プロクレアホールディングス～

全国的にも有名な夏祭りが多い東北。青森ねぶた祭、盛岡さんさ踊り、秋田竿燈まつり、仙台七夕まつり、山形花笠まつり、福島わらじまつりなど、様々な祭りが存在します。短い夏に完全燃焼する人々のエネルギーは、観る者の魂を揺さぶるものがあります。

青森県に本店を置く**青森銀行**と**みちのく銀行**は、2025年

1月に合併し、新たに「青森みちのく銀行」となる予定です。両行の親会社であるプロクレアホールディングスは、新銀行の発足後も「地域とともにあり、地域の伴走者となる」という意志を示すとともに、合併に向けて両行行員の融和を図ることを目的に、2023年、青森ねぶた祭での大型ねぶたの運行に初参入しました。

### 国の重要無形民俗文化財「青森のねぶた」

8月、青森県内では、ねぶた祭（一部地域では、ねぶた祭と呼ばれます）が各地で開催されます。青森市（青森ねぶた祭）、弘前市（弘前ねぶたまつり）、五所川原市（五所川原立佞武多）などが知られています。

ねぶた（ねぶた）の起源は定かではありませんが、七夕祭りの灯籠流しの変形であろうといわれており、「青森のねぶた」と「弘前のねぶた」は国の重要無形民俗文化財にも指定されています。

今回取り上げる「青森ねぶた祭」は、毎年8月2日～7日に青森市で開催されます。大きなねぶたが運行され、お囃子や跳人（はねと）と呼ばれる大勢の踊り手も参加して、「ラッセラー、ラッセラー」の掛け声が響き渡り、観光客も含めて大きな賑わいを見せています。2023年の青森ねぶた祭の来場者は101万人と推計されています。



▲ プロクレアホールディングスの初陣ねぶた

## 22年ぶりの大型ねぶたデビュー

青森銀行とみちのく銀行は、これまで、大型ねぶたを運行する他団体の前ねぶた（大型ねぶたの運行隊列の先頭を進む小型のねぶた）の運行に協力するなど、青森ねぶた祭を盛り上げてきました。

大型ねぶたへの参入は、2022年に青森・みちのく両行の経営



▲ 青森銀行（左）とみちのく銀行（右）の前ねぶた

陣の間で、「地域貢献と、合併を控えた両行行員の交流を深めるため、大型ねぶたに参入してはどうか」という話題が出たことがきっかけ。同年8月に正式に参入を決定しましたが、翌年の祭り本番まではわずか1年弱。急ピッチでの準備が始まりました。

大型ねぶたの運行に必要なのは、何と言ってもまずはねぶた。その制作は、2023年に第7代ねぶた名人となった竹浪比呂央さんに相談し、名人の下で修業していた野村<sup>たかし</sup>昂史さんに制作していただくこととなりました。



さらに、楽器の手配、練習場所の確保、役割によって異なる3種類の半纏や浴衣のデザイン・制作など、やるべきことは山積み。特に、半纏については、2023年に新型コロナによる行動規制が解除され各地で祭りが再開したことから、半纏の制作会社が繁忙となり納品が本番直前となるなど、気をもんだそうです。しかし、青森ねぶた祭への大型ねぶたへの新規参入は22年ぶりということで、関係者から様々なサポートをいただき、なんとか間に合わせることができたとのことでした。



## 祭りを通じて両行の融和を図る

大型ねぶたの運行において、ねぶたそのものに並んで重要となるのが、囃子方、運行係と跳人です。

笛、太鼓、手振り鉦を演奏する囃子方は、青森・みちのく両行の行員とその家族から募集したところ、子どもを含めて約200人の応募がありました。早速11月から練習を開始しましたが、約8割が未経験者のため、経験者と社外の指導者約20人にサポートしてもらいながら、練習に打ち込みました。全体練習のライブ配信も行ったそうです。最終的に、本番（2023年8月）までに計64回もの全体練習を重ねたことで、演奏技術の向上と参加者同士の交流が深められたといえます。

運行係は、ねぶたを動かす役割。新規参入でもあり、目標は「事故なく、安全に」。巨大なねぶたを実際に動かすにはスペース等の問題があるため事前練習はできず、ぶっつけ本番となります。それでも、行員の有志で「ねぶた愛好会」を立上げ、当日の運行について綿密に打合せを重ねました。

そして迎えた本番当日。運行係は、これまでの前ねぶたの運行経験を活かし、両行の行員が協力して大型ねぶたを操ります。そして、囃子方の奏でる音楽に合わせて踊るのは跳人。両行の行員とその家族が参加し、ともに祭りを楽し

み、大いに盛り上がりました。

大型ねぶたの運行には多くの人手が必要で、プロクレアホールディングスの大型ねぶたの運行には、5日間で、延べ1,800人超が参加したとのこと。人手がかかり、参加者が協力し合う必要がある祭りだからこそ、両行参加者の融和が図られたといえるでしょう。



▲ 囃子方の全体練習の様子（上）と当日の跳人の様子（下）

## 休む間もなく2024年8月に向けて始動

大型ねぶたへの参入後、多くの方々から「見たよ」、「よかったよ」と声を掛けられ、地元の方々にとっても喜んでいただけただけを実感したといえます。また、参加した行員からは、「練習を重ねる中で親交が深まった」、「組織関係なく交流でき、融和が図れた」、「業務でも交流しやすくなった」等の声が聞かれており、大型ねぶたの運行に参入した目的は達成できたと手応えを感じています。

そうした中、囃子方は早くも2023年秋から、2024年の本番に向けて練習を再開。囃子方には新たに数十名のメン

バーが加わり、メンバー間の交流を深めながら、演奏技術の更なる向上を目指しています。

プロクレアホールディングスでは、今回の経験を活かし、引き続き、青森市外の行員を含むグループ全体としての一体感を生み出すことに取り組んでいくとともに、県内各地で開催される祭りなどにおける神社の神事のサポート、地域の祭りやイベントへの参加、お囃子の子供たちへの指導などを行うことで、地域の伝統ある祭りの継承に貢献していきたいとしています。

### 大迫力！プロクレアホールディングスの大型ねぶた

野村昂さんに制作してもらったプロクレアホールディングスの大型ねぶた「大日大聖不動明王」は、2023年の青森ねぶた祭で優秀制作者賞を受賞し、2024年7月まで青森駅前のねぶたの家「ワ・ラッセ」に常設展示されています。

また、送りねぶた（後ろ側のねぶた）は、青森・みちのく両行の融和をイメージした夫婦岩（左：青森銀行、右：みちのく銀行）から、「猿田彦大神」が日の出と共に出現する姿が描かれており、地域とお客さまの明るく豊かな未来を創っていくプロクレアホールディングスの想いを表現しています。



▲ プロクレアホールディングスの送りねぶた

## サイクルツーリズム推進を通して祭り・イベントをつなぐ～スルガ銀行～

**スルガ銀行**は、独自性のあるリテール事業を広域展開する一方、地元の静岡県から神奈川県に跨るエリアでは、地域に密着したコミュニティバンクとしての役割を果たしています。

同行は、地域貢献活動の一環として地元の祭りに積極的に参加しており、例えば、本店のある沼津市で毎年7月に開催される狩野川花火大会では、特別協賛として、花火大会のフィナーレを飾る全長500mの「ニアガラの滝」を提供。また、関東の七夕祭りとして有名な「湘南ひらつか七

たまつり」では、平塚支店前に大きな七夕飾りを出しています。

これに加えて、スルガ銀行は、「サイクルツーリズム」に取り組んでおり、その中で地元地域密着型の特長的な祭りも発信しています。



▲ 湘南ひらつか七夕まつりの飾り。  
スルガ銀行提供。

## 自転車で町とイベントの魅力を伝える



▲ サイクリング用電動自転車。

サイクルツーリズムとは、自転車を活用した観光のこと。国土交通省は、2016年の「自転車活用推進法」の成立を機に、「自転車を活用した観光地域づくり」を有望な「体験型観光」と位置づけ、各自治体や施設への積極的なサポートを展開しています。

スルガ銀行は、地域の観光資源と連携したサイクルツーリズムにより、地元のサービス業や観光業を支援する「サイクリングプロジェクト」を推進。行員が地元各地を自転車で巡り、地域の風景や知る人ぞ知るスポットなどを同行のSNS(note、Instagram、X、Facebook)やWebサイトで紹介するシティプロモーションの実施や、1～2日ばかりで富士山や伊豆、三浦半島など静岡・神奈川県内を巡るサイクリングイベントの開催など、地域の魅力を積極的に発信しています。2024年4月現在、パートナーシップ協定を締結した自治体等の数は26に上ります。



▲ 提携自治体等のポタリングロゴ。

「サイクリングプロジェクト」のSNSでは、これまでに、静岡県島田市の「島田髷まつり」や、神奈川県海老名市の「中新田かかしまつり」（ともに毎年9月開催）、神奈川県平塚市の「湘南ひらつか七夕まつり」（毎年7月開催）などの祭りを取り上げています。中でも「中新田かかしまつり」は、海老名市とのパートナーシップ協定に基づく共同企画「えびぼた」（海老名市内を自転車でのんびりと巡る=ポタリングする）の一環で、「海老名の秋の風物詩」として紹介したものの。広がる田んぼと、立ち並ぶかかしが、何とも言えないほっこりとした情景を作り出しています。



▲ 中新田かかしまつりの様子。上はスルガ銀行提供。  
下は中新田かかしまつり保存会提供。

### 誰でも楽しめるポタリング

ポタリングとは、サイクリングの一種で、自転車で、特に目的を決めず、のんびり気ままに走ることを意味します。ぶらぶらするという英語の「Potter」から派生した和製英語で、省略して「ポタ」とも呼ばれます。

一般にサイクリングは、目的地（ゴール）を目指して長距離走行や高速走行をすることもあるのに対し、ポタリングは気軽に散

歩するペースで楽しめます。

街中でグルメを味わったり、レトロな建物を撮影したり、気になった場所で立ち止まりながら走る。あるいは、風を感じながら川沿いを走るなど、ポタリングの楽しみ方は自由です。使用する自転車についても決まりはないので、ママチャリでもOK。ときには、のんびり愛車のペダルをこいでみてはいかがでしょうか。



## 茶畑サイクリングで世界的イベントを盛り上げる！

スルガ銀行は、「サイクリングプロジェクト」の取り組みの一環として、サイクリングイベントを通じた祭りへの協力も行っており、その1つに「世界お茶まつり」でのサイクリングイベントがあります。静岡県は全国有数のお茶の生産地。世界お茶まつりは、新しいお茶の楽しみ方の提案等により、お茶文化の普及や需要創造を図ることを目的に、静岡県の主催で3年に1度開催されています。8回目となる2022年の開催では、20の国・地域から過去最多の74万人が参加。ある意味、オリンピックやワールドカップと並ぶ世界的イベントと言えるかもしれません。

スルガ銀行がこの祭りに協力するようになったのは、以前から同行のサイクリングイベントを知っていた静岡県の担当者から、「牧之原台地の広大なお茶畑を多くの観光客に見てもらいたい。サイクリストにも来てもらうきっかけ作りとして協力してほしい」との依頼があったことがきっかけ。

2019年（第7回）と2022年（第8回）には、2005年に「人と自然が織りなす日本の風景百選」に選定された日本有数の製茶地帯・牧之原のお茶畑をサイクリングで巡り、参加者のSNSにリアルタイムで写真や感想を投稿してもらうイベントを企画・運営しました。このイベントは、神奈川県・東京都など関東地区からの参加者が大半で、SNSを

通じて静岡県外の人に静岡県の魅力を紹介できるとてもよい機会になったとのことでした。



▲ 世界お茶まつりサイクリングイベントの様子。スルガ銀行提供。

## 自転車のように自由で小回りの利いた情報発信を！

スルガ銀行の担当者は、サイクリングやポタリングを通じて地域の人々との繋がりを実感できたことや、SNSで各地域を紹介した後にその地域のSNSのフォロワーが増えるなど、人々が関心を持ってくれていることが励みになっているといいます。また、行内でも、「サイクリングプロジェクトの取り組みが新聞の記事になると、地元の皆さんに恩

返しができる」と実感する」など、サイクリングプロジェクトに関してポジティブな声が多く聞かれるとのことでした。

サイクリングプロジェクトは、これからも、新しい地域の方々や自治体も含めて連携・つながりを深め、新しい切り口で地域の魅力をアピールしていきたいとしています。

## おわりに

全国の地方銀行は、大小を問わず地域の様々な祭りやイベントに関わっており、今回紹介した事例は、そのごく一部に過ぎません。これからの季節、あちこちで祭りが開催されますが、ぜひ皆さんも、地元の祭りに参加した際は、地域を元気にしたいとの地方銀行員の意気込みを感じ取っていただければと思います。

なお、東京・神田に事務所を構える私ども全国地方銀行協

会も、日本三大祭りの1つと言われる神田祭に職員が参加し、町会の神輿を担いでいます。「地域のため」でもありますが、やはり祭りは自分自身が楽しめないといけませんよね。



▲ 神田祭の法被を着た職員。

<sup>1</sup> 日本経済新聞「無形民俗文化財の伝統行事、20県で60件休廃止」（2017年1月3日更新日経電子版 [https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG03H2D\\_T00C17A1000000/](https://www.nikkei.com/article/DGXLASDG03H2D_T00C17A1000000/)；参照2024年5月15日）

<sup>2</sup> 文化庁「文化に関する世論調査の結果について（2019年3月）」 [https://www.bunka.go.jp/tokei\\_hakusho\\_shuppan/tokeichosa/pdf/r1393020\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/pdf/r1393020_01.pdf)